

「お待ちせしました。ご乗車ありがとうございます。どちらまで参りますか」

客がシートにすべりこむのを待って、久我は告げた。規則では、「ご乗車ありがとうございます」と「どちらまで参りますか」のあいだに、「城栄交通の久我と申します」といわなければならぬ。知らないことになっている。が、それは省いていた。客はタクシー会社にも運転手の名前にも興味がない。知りたければ、助手席のダッシュボードの上に掲げられたプレートを見ればこと足りる。「とりあえず、まっすぐ」

男がいった。午後十時、第一京浜の下り線だ。上り線ならともかく、下り線はまず空車が走っていない。京浜急行「青物横丁」駅に近いビジネスホテル前を客は指定し、久我はピックアップしたのだ。

そこに立っていたのは、黒っぽいコートを着て、両手をポケットに入れた男だった。

「ご予約のお客様ですか」

訊ねるために、細めにドアを開けた。

「カケフだ」

男がいったのでさらに大きくドアを開いた。

名前の確認は重要だった。暮れの繁忙期など、予約した客のフリをして乗ってくる者がいる。こちらから予約名を告げてしまうと、

「そうそう」

と、ごまかされる。実際に予約した客は乗る筈の車がおらず、会社に苦情がいく。会社から無線で連絡があつて、ちがう客を乗せてしまったとわかつて、メーターは押しているし、今さら降りてくれともいえない。

だいたい、人の名を騙つて乗ってくるくらいだから酔っている上にタチが悪いと相場がきまつている。嘘をついたでしようなどというおもうものなら、「まちがえたのはそつちだろう、なのに因縁つけるのか、タクシーセンターに通報して仕事をできなくしてやる」などとひらきなおつてきて、あわよくば料金を値切る、あるいは踏み倒そうという奴までいる。

それが嫌なら、夜、盛り場で客を拾わないことだが、酔客を相手にしなかつたら、タクシーの仕事は成立しない。久我の知る限り、それで仕事が成立しているのは、相番の中西幸代くらいだ。相番というのは、今久我が運転している車を分けあつて運行しているドライバーだ。

中西幸代はDVで服役中の夫と二年前に別れ、城栄交通に入ってきた。小学生の子供二人を抱えているので、夜の乗務は難しい。そこで十二時間シフトをとり、昼専門の早番勤務をしている。午前七時に出勤する中西幸代は、会社が契約している企業役員の、朝の送迎をこなし、病院やデイクアセンターなどから指名で入る仕事を一日五本近くうける。

午後六時には帰庫して、久我に車をひき渡す。

久我は逆に夜しか乗務しないので、中西幸代にとつてもびつたりな相番というわけだ。

久我が夜しか仕事をしないのは、簡単な理由だ。

夜が明け、空が白み始めるまで、決して眠れないからだ。独り者の久我には、夜家にいなければならぬ理由はない。

ドアを閉じ、久我は後方を確認すると、アクセルを踏んだ。

血が匂った。ルームミラーで客の顔を見直す。

背はそれほど高くないが、がっしりとしている。ラグビー選手のような体つきだ。暗くて、年齢の見当はつきにくい、三十代後半、いついて自分と同じ四十歳くらいだろう。

コートを着ているのに血が匂うというのは尋常ではない。服の上に血が染みでるような怪我を負っているか、返り血を浴びるほど誰かを痛めつけたかのどちらかだ。

「大森駅にいつてくれ」

観察されたのに気づいたかのように、男は告げた。

「承知しました」

答えて久我は右車線に寄った。乗ってすぐ、「とりあえず、まっすぐ」といったのは、一刻も早くその場を離れたかったからだろう。喧嘩でもして、逃げだそうとしているのかもしれない。

もしそうなら、一、二キロも走れば「降りる」といいます可能性があつた。が、大森駅なら第一京浜から西に右折する必要がある。

そう考え、無線配車であつたことを改めて思いだした。この時間、無線配車でビジネスホテル

前に迎えを求め客は、たいてい空港をめざす。十中八、九「羽田空港」といわれるだろうと、久我は予想していたのだ。

無線配車を希望する客が行先を決めていないのは妙だ。一刻も早くそこを離れたいような人間はタクシーの予約などしない。反対側の上り車線にはいくらでも空車が走っている。道路を渡って手をあげればすむ。

鈴ヶ森の交差点を右折した。

「大森駅の駅前でもよろしいでしょうか」

それによつては最初の道である桜新道を左折するかどうか決めなければならない。

客が喋った。

「ガール」

「はい？」

「駅でいい」

その瞬間、久我はこの客の前にも乗せたことを思いだした。

六本木のロシア大使館近くから中目黒までだった。六本木を抜け、駒沢通りに入ったところで、この客が不意に話しかけた。

フランス語だった。

そのときも、「はい？」と訊き返した。「ガール」は、フランス語で駅という意味だ。

なぜフランス語で話しかけてきたかの想像はついたが、久我に応じてやる気持はなかった。あくまでも人ちがいで通す。「久我晋」という名はありふれてはいないが、この世に同姓同名が決

していないというほど、珍しくもない。

それに何より、「久我晋」とフランス語を結びつけられるのは、危険な人種と決まっている。たとえそれがひと目でわかる「知り合い」であっても、久我には仲よくするつもりはなかった。

まして昔話などする気は決してない。

大森駅の東口で客は降りた。迎車料金と深夜割増しをあわせても三千円に届かない。

「釣りはいい」

客が一万円札をだしていった。

「それは困ります」

いくらなんでも多すぎる。ふりかえり、久我は正面から男の顔を見た。駅前明るく、目鼻立ちがはっきりわかった。知らない顔だ。

「いや、うけとつてくれ」

反駁を許さないような気迫が、男の声にはこもっていた。体からだだよう血の匂いも、その気迫をあと押しした。

男が傷ついているようすはない。とすると、誰かを傷つけたのだ。

「ありがとうございます」

久我はいった。男は頷いた。男も正面から久我の顔を見て、納得したような表情だ。

それ以上何もいわず、車を降りていった。

「ありがとうございます」

もう一度いい、久我はドアを閉めた。

六本木であの客を乗せたのは半月ほど前だった。

「エスクー・ラヴィ・オ・ジャッポン・エー・アグレアブル？（日本の暮らしは楽しいか）」と訊ねたのだ。

楽しいと答えてやればよかったか。それとも苦しくてつらい、といったら、何といたろう。駒沢通りと山手通りの交差点近くで降りたときは、ふつうに料金を払い、釣りはいいとはいわなかった。

メーターを空車に戻して、久我は無線のマイクに手をのばした。今の客が、運転手指定で配車を頼んだのかどうか、主任の岡崎（おんざき）に訊ねてみようかと思っただ。

窓ガラスを叩く音にふりかえった。サラリーマンらしき二人連れが立っている。

ドアを開けると、

「羽田のエアポートホテル、いって下さい」

と乗りこんできた。

「承知しました」

久我はマイクを戻した。岡崎に事実を確かめたところで何になる。あの男がかつての久我のことを知っていたとしても、それだけの話だ。また指名配車があり、一万円で釣りはいいといわれ、ありがたくもろう。そしてフランス語が理解できるとは決して認めない。

なぜならあの客と会ったことはないからだ。

本当にそういきれるのか。

運転をしながら久我は自問自答した。

いきれる。

それが証拠に、死んでいった仲間の顔を始終思いだし、それが夜の眠りをさまたげている。

いや、死んだ人間の顔は忘れなくとも、生きて別れた人間は思いだせないことがあるかもしれない。

あの客がそのひとりではないと、本当に断言できるのか。

自信はなかった。

だがそうだとしても、かわりあいになるつもりはない。昔は昔、今は今だ。

そのとき、

「運転手さん、忘れものだよ」

客のひとりがいった。

「え？」

「これ。携帯」

ルームミラーの中で客が携帯電話をかかっていた。

「あ。ありがとうございます」

「やっちゃうんだよな。タクシーの中って」

もうひとりの客がいった。

「乗ってるあいだにメールとか見てさ、しまったつもりでポケットから落としちゃうんだよね」

「そうですね」

話をあわせた。あの客は携帯など見ていなかった。

「でもさ、すぐ気がついて電話してくるよ」

信号で止まると、体をねじり、携帯をうけとった。

「けど見たことない型だな。どこのだろう」

さしだした客がいった。目をやるうとして、信号が青になった。助手席におき、久我は運転に集中した。

「中国じゃないか」

「そうだな。中国製、多いものな」

「安いんだろ」

「安い、安い」

「使えるの？」

「上海にいた奴の話じゃ、けっこう使えるらしいぜ。ただ外側がすぐぼろぼろになるっていつてた」

客どうしのやりとりを聞きながら、久我は助手席を見た。

スマートフォンのような画面の下に、ダイヤル型のスイッチがついている。確かに珍しい形だ。周囲の人間がもっているのを見たこともなかった。

あの客が落としたのだろうか。だとすれば意外だ。およそ忘れものなどしそうなタイプだったからだ。

忘れものをする客というのは、たいてい乗ってきた瞬間にわかる。

行先をきちんとえないほどあせていたり、落ちつきがなく、ひっきりなしに携帯をいじつ

たり、話しかけてくる。

そういう客が降りた直後は、久我は後部席を点検することにしていった。携帯電話やバッグ、ときにはそこから金をだした筈の財布を忘れていたりする。

急いで窓をおろして呼び止め、忘れものを知らせたことも一度だけではない。

またそういう客に限って、「あつ」といっただけで奪うように忘れものを受けとると、礼もいわずに立ち去るものだ。

礼をいってほしいわけではないが、礼をいうのも忘れるようでは、またどこかで忘れものをするにちがいないと思ってしまう。

あの客の前に乗せた客を、久我は思い返した。三田から品川駅の港南口まで乗せた、五十前後の女だった。仕事帰りらしくスーツを着て、大きなバッグをもっていた。

いや、あの女ではない。乗っている間ずっと携帯で喋っていて、しかもそれはスマートフォンでなかった。やたらに飾りのついたガラ、携を耳にあてる姿が記憶に残っている。

羽田空港に近いビジネスホテルで二人を降ろした。話の内容から、明日の朝早くの飛行機に備えてホテルで前泊するのだとわかった。

女の前の客か。

女の前に乗せたのは口開けで、高輪から麻布十番までの客だった。サラリーマンらしい、スーツ姿の若い男だ。

いや、あの客でもない。あの客は携帯を首から吊るして、ワイシャツの胸ポケットに入れていた。

ホテルのエントランスの端に車を止め、久我は忘れものの携帯をとりあげた。

黒い液晶画面に、明るい緑色のカバーがはまり、ダイヤル型のスイッチが下四分の一を占めている。形だけではスマートホンなのかそうでないのかがわかりにくい。

試しにダイヤル型のボタンを押してみた。

「Please enter your password (パスワードを入れて下さい)」というメッセージが画面に表示された。

ロックがかかっているようだ。久我はその電話を上着のポケットに入れた。パイプ機能になっていた場合、身につけていないと、落としたり客がかけてきても気づかない可能性がある。

ホテルのエントランスをでた。都心に戻るまで客はおらず、落としものの携帯も鳴らなかった。途中、会社は無線を入れ、岡崎に忘れもののことを告げる。

客が会社で電話をしてくる場合もあるからだ。

忘れものの携帯が振動したのは、久我が虎ノ門を走っているときだった。赤坂で客を降ろし、とりあえず銀座方面をめざしていた。

車を寄せ、ハザードを点すと携帯をポケットからとりだした。画面に明りが点っているが、かけてきた者の番号や名前の表示はない。

「No Caller ID (非通知)」となっている。

応答のボタンは何となくわかった。久我はそれを押し、耳にあてた。

「もしもし。城栄交通の運転手です」

一瞬、間があった。

「タクシーの運転手さんか」

男の声がいった。

「はい」

答えながら、乗せた客ではないと久我は気づいた。

声が高い。忘れものをした可能性のある無線配車の客は、もつと低い声をしていた。

「さつき、あなたの車にその携帯を忘れた者だ」

だが、かけてきた男はいった。

「はい」

「悪いが今いるところに届けてもらえないか。メーターを押してもつてきてくれてかまわない。

料金は払う」

「どちらでしょう」

「六本木だ。あなたはどこにいる？」

「わりと近くにあります。六本木のどちらまでお届けすればよろしいでしょうか」

「ミッドタウンの近くだ。何分くらいでこられる？」

「三十分いただければ、まちがいありません」

「じゃあ、ミッドタウンの向かい側にある北条ビルほうちょうビルにきてくれ。その三階の『ギヤラン』で店

にいる」

「北条ビルでございますね。承知いたしました」

「あ、あなたの名前と会社名を教えてください」

「城栄交通の久我と申します」

「城栄交通の久我さんだな」

念を押し、男は通話を切った。

久我は息を吐き、忘れものの携帯を見おろした。トラブルの匂いがする。

今日乗せたどの客であろうと、会えばひと目でわかる。それはつまり、別人であつてもすぐわかるということだ。

別人だつたら、なぜ落とした本人が電話をしてこなかった、という疑問がまず生じる。携帯を落としたと、本人から聞いた人物でなければ、あの電話はかけられない。

疑問の答は、本人が電話をしてこられない状況にあるからだ。だからその人物を装って、携帯を入手しようと考えた。

単純に考えよう。

あの客が何らかの事情で直接久我から携帯を回収できなくなり、知り合いに頼んだという可能性もある。

かわりに電話をかけてきた人物が理由を説明するのを省き、本人を装っただけかもしれない。

いや、ない。

ハザードを消し、車を発進させながら久我は思った。

理由は電話のやりとりの最後だ。

「あなたの名前と会社名を覚えてくれ」と男はいった。

あの客はまちがいなく、久我の名前と会社を知っている。そうでなければ、無線配車を頼めな

い。フランス語で話しかけてきたのも久我の名を知っていたからだ。

電話をしてきたのが、あの男に頼まれた人物なら、名前と社名を訊ねる必要はなかった。

城栄交通の久我の車に携帯を忘れたと、あの客はわかっている。

次の疑問は、電話がかかってくるまでに一時間以上が経過している点だ。

泥酔した客でない限り、携帯の忘れものは三十分以内に連絡がくる。忘れた人間はそれだけ回収を急ぐ。

大森駅であの客を降ろしてから、一時間四十分近くがたっている。その間、本人から連絡はなく、ようやくかけてきたのは別人だ。

あの客が漂わせていた血の匂いが問題だ。

誰かに血を流させ、平然としていられる人間なら、その人物を装って携帯を奪おうという者がいても不思議はない。

なぜ携帯を欲しがるのかという問題は二の次だ。

あの客が誰かに血を流させても平然としていられる人間であることに疑問の余地はない。「久我晋」という名とフランス語を結びつけられるなら、まちがいなくそうだ。

メーターは押さず、六本木まで走った。溜池の交差点付近はいつも通り流れが悪かったが、それでも二十分はかからない。慎重を期して、三十分と告げた。

六本木交差点をミッドタウン方向に右折し、最初の信号を越したあたりで久我はハザードを点した。

カーナビゲーションを見ると、北条ビルは三十メートルほど先の左側にある建物だった。

三階の「ギヤラン」という店にいる、と電話をしてきた男はいった。

さあ、次の問題だ。

催促の電話があるまでここで待つか、それとも「ギヤラン」までもっていくか。

電話をしてきた男が、本人に頼まれたわけではないのに携帯を入手しようとしているなら、「ギヤラン」に足を踏み入れるのは、男の思うツボだ。

「ギヤラン」には、男と仲間が待ちかまえていて、久我をとり囲み有無をいわさず携帯をとりあげようとするかもしれない。

もしそこにあの客がいればまだいいが、その可能性は低い。なぜなら、あの客がまともな状態

でいるなら、本人が電話をしてきたにちがいないからだ。いても電話をかけられないような状況にある、と考えるのがふつうだ。痛めつけられているか、

死んでいる。そしてその姿を久我に見られてもかまわない、と電話をしてきた男が考えていたら、トラブルとしては最悪だ。

いや、そこまで問題を悪化はさせないだろう。久我の口まで塞がなければならなくなる。

だが一方で、なぜ「ギヤラン」という店名を教えたのが気になった。

ふつうに考えれば、店の番号なり別の携帯の番号を告げ、着いたら連絡をくれ、という。道ばたまでとりにくければ、すぐにカタがつくからだ。

「ありがとう。ご苦労さん」

と、いつて携帯をうけとつてしまえば、それで終わり。たがいにあとをひかずすむ。

電話をしてきた男は、それではすまない可能性を考えたのだ。

別人だと見抜かれ、久我が携帯を渡さない場合に備えた。

どうするか。

本人だろうが別人だろうが、さつさと携帯を渡し、帰ってくるのが一番簡単だ。

そうしてはいけない理由があるのか。

ひとつだけある。あの客が無事でいて、携帯を回収しようとしたら、久我が別人に渡したとわかったとき、トラブルになる。

久我は息を吐いた。ジャケツトから忘れものの携帯をだし、タクシーのダッシュボードにしまった。

シートベルトを外し、エンジンをかけたままタクシーを降りると、予備のキィでドアをロックする。

あたりには空車のタクシーが何台も止まっている。銀座のある区画では平日の午後十時から午前一時まで、タクシー乗り場以外で客を乗せることが禁じられているが、六本木にはその規制がない。だから思い思いの場所で運転手は客を待つ。

北条ビルの前に立った。一階から七階まで飲食店が入っている。袖看板の多さから、小さい店ばかりだと知れた。「ギヤラン」の看板もある。

一階の喫茶店のわきの通路をつきあたったところにエレベーターホールがあった。二基のエレベーターが設置されている。扉の上にある表示を見ると、一台は三階で止まり、一台は一階にいた。ボタンを押し、開いた扉に久我は乗りこんだ。「3」のボタンを押し。

三階には三軒が入っていて、「ギヤラン」は一番奥の店だった。黒く塗られた扉に金色の文字で店名が入っている。

久我はその扉を押した。妙に明るい店だ。右手前がカウンターで、奥にテーブル席が四つある。そのテーブル席に男が三人、かけていた。女の姿はひとつもない。

営業していない店だと、そのとき気づいた。

男たちは全員スーツ姿だがネクタイはしめていない。驚いたように久我を見ている。

「城栄交通です」

「ああ」

男のひとり^が立ちあがった。手にした煙草^{たばこ}をひと吸いし、テーブル上の灰皿に押しつけた。缶ビールが数本並んでいる。

「早かったな。ご苦労さん」

三人の中では一番年配で、四十代の半ばといったところだ。筋者^{すじもの}か、それに近い人種だとひと目でわかった。

「あのお、お客様はどちらでしょう」

久我は訊ねた。あとの二人はまだ三十になったかどうかというチンピラで、無言で久我をにらんでいる。

「お客様は俺だよ」

立ちあがった男がいった。少し高い声は電話と同じだ。

「申しわけございません。お客様はお乗せしていないと思うのですが」

久我は男の足もとを見ながら告げた。

「はあ？ 何いってんだ。俺が忘れたから電話したんだろうが」

「お言葉を返すようですが、本日はお客様をお乗せしておりません。電話をお忘れになったのは、別のお客様だと記憶しております」

男が足を踏みだした。同時にチンピラ二人も立ちあがった。

「それは運転手さんの勘ちがいだ。久我さん、ていつたっけ？」

男は久我の前に立ち、顔をのぞきこんだ。

髪を短く刈り、首が太い。赤らんでいるのは酔っているのか怒っているのか。

久我は無言で頷いた。男は手をさしだした。

「忘れたのは俺だ。あの電話がなくて困ってる。だから返してくれよ」

久我は息を吐いた。

「承知いたしました。私が勘ちがいしていたのかもしれませんが、電話はお返ししますが、その前にひとつだけ確認をお願いいたします。お客様はどちらで私どもの車をお拾いになりましたか」

久我は男の目を見つめた。瞬時に男の顔がこわばった。チンピラのひとりが、

「おいっ」

とすごんだ。男は片手をあげ、それを制した。

「疑ってんのか、久我さんよ」

声を低めて、いった。

「とんでもございません。ただ携帯電話は、失くされた方にとってはそれは重要なものですから、

「まちがった方にお渡ししてはいけないと思ひまして」

「まちがった方だあ?!」

「チンピラが大声をあげ、歩みよつてきた。」

「まちがったつてのは何だ、まちがったつてのは。おおう？」

「首を曲げ、下から久我の目をにらみつけた。」

「ではせめてお名前を。配車手配のときに何とおっしゃつてご予約いただきましたでしょうか」

「男の表情が一瞬ゆるんだ。」

「桜井だ」

「それがあの客の本当の名なのだ。会社には「カケフ」と名乗つたが。」

「申しわけございません。車のお手配は、別のお名前で承つております」

「何？」

「再び男は顔をこわばらせた。」

「だから何だつてんだこら！ ごちゃごちゃいつてつと、ぶつ殺すぞ、おい」

「もうひとりのチンピラが空き缶を床に叩きつけた。」

「そうおっしゃられましても、大切なお忘れものを別の方にお渡しするわけには参りません」

「おう、お前よ」

「最初のチンピラが胸を反らした。手をだしてこないのは、話し合ひでまだ何とかなると思つてゐるからか。」

「あの電話は兄貴のなんだよ。俺らがそれを証明するよ。その兄貴が、きちんと名乗つて、返し

てくれつていつてんのを、なんで返さねえんだ。嫌がらせか、おい」

「そうおっしゃられましても……」

「兄貴は人がいいから何もしねえが、俺らはそうはいかねえ。他人のものをもつていつて返さねえなんて、人の道に反するだろうが」

「確かにおっしゃる通りです。他人のものを勝手にもつていくのは、人の道に反します」

「久我はチンピラの目を見て告げた。チンピラは瞬まばたきした。」

「参つたな」

「男がいった。久我の目を見ている。」

「久我さんよ。電話を忘れたのは俺じゃないと、どうしてもいいはるのか」

「兄貴が嘘つきだつてのかわ、おい」

「嘘をついているとはひと言も申しておりません。お名前がちがつていると申しただけです」

「それが嘘をついてることになるんだらうが！ おう」

「テーブルのところのチンピラが空き缶を蹴つた。缶は久我のかたわらをかすめ、店のドアに当たつた。」

「やめとけ」

「男は首をふつた。」

「久我さんはずんぜんびびつてないぞ。お前らの脅しなんぞ、ちゃんちゃらおかしいつて顔だ」

「久我の目を見つめたままいった。恐しくて膝が震えております。ただ、お名前がちがつている方に忘れ

ものをお渡ししてしまいますと、私どもの責任問題になります」

「今もう、責任問題になってんだ、この野郎！」

男が怒声を浴びせた。

「俺の携帯を返せつつってんのがわかんねえのか、おい」

「申しわけございません。私どもの車にお乗りになったお客様に、もう一度ご連絡をいただけますよう、お願い申しあげます」

久我は一礼して、踵を返した。

「いいんだな！」

男が叫んだ。

「城栄交通の久我って、こっちはわかってるんだぞ」

「何かあったら、警察のほうに参ります」

「何もしてねえよ。指一本、あんたに触れてない」

「そうでした。大声で怒鳴られただけで」

「我慢できねえ！ 兄貴、この野郎ぶつ殺します。そうすりや警察もへったくれもねえ！」

久我はくるとチンピラに向き直った。

「申しわけございません。携帯はここにおもちしておりません。私を殺すと、手に入らなくなりませんがそれでよろしいですか」

チンピラは目を見ひらいた。

「何なんだ、お前」

「お殺しになりますか？」

チンピラに一步近づいた。

チンピラは後退した。

「何者なんだ、おい」

男がいった。

「申しあげております。城栄交通の運転手で、久我と申します」

男に向き直り、告げた。男が瞬きした。顔にあった赤みが消えていた。

「失礼いたします」

久我は店の扉に歩みよった。

「覚悟しておけよ」

声が背中を浴びせられた。

答えず扉を引き、店の外にでた。誰も追ってこない。

エレベーターに乗りこみ、一階に降りた。苦い息がでた。

なぜ携帯を渡してしまわなかったのだ。そうすればあとをひくこともないのに。

私たちのせいだ。あまりに稚拙なやりかたに、途中で腹が立ってきた。脅せばいうことを聞かせられると本気で思っていたようだ。もつとかしこい方法があった筈だ。

止めておいた車に戻った。フロントグラスごしに北条ビルの方角を見つめた。

男たちが降りてくる気配はなかったが、これで終わるわけがないともわかっていた。会社も名前も相手には知られている。